



町民文芸

只見短歌会

三月詠草

大塚栄一

指導

師と友の篤き情に導かれ三十五年も歌詠みて来し

古川 英子

離れ住む娘は秋の日に戻りわが手届かぬ掃除手伝ふ

馬場 八智

裸木に雪降りかかり凍り付き見渡すかぎり花咲きしごと

渡部ゆき子

雪道を帽子のみ見せゆつくりと行く人のあり雪降りつものる

小倉キミ子

残雪のまだ多き下梅の芽の散らばり空しうそ啄みし

関谷登美子

飼猫の死にて三年後残りある一匹の名を二階にて呼ぶ

新国由紀子

転任に去り行く人は玄閤に黙礼しつつ鍵を確かむ

目黒 富子

過ぎゆきし同期の友との再会は四十数年経てど変はらず

渡部ヨリ子

ショートステイに入所の我を介護士ら代るがはるに労はりくるる

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

四月例会

目黒十一

指導

指折りて三才なのといひいなの日
万才や公民館に春来たる

敦子

ウキウキと荷を解き香る沈丁花
節分やピーナツ選ぶ鬼面の子

味代子

啼泣の待つ間長かり初音聞く
精氣得て鯉の回遊諸葛菜

吉児

花満開世に戦など無き如く
新らしき傘にかすかや春の雨

弘子

種芋の転びて己が位置を知り
此の星の片隅広し春を踏む

さちを

山桜空にとけゆく花見山
観音の全身春の日の中に

恒夫

わが庵はなにごともなく桜咲き
廢屋にスイセン咲きたり秩父の里

信

山を出で月赤々と西行忌
にぎやかな声搦き立ての草の餅

礼

待ち切れず両手に零れひなあられ
ひな人形遅く仕舞へと父の顔

都

年度越え抱えし仕事花の雨
春灯の同じページの読書かな

修一

シャボン玉一番白い君のシャツ
まねっこす子等口に指初音聞く

洋子

彼岸日や母の好みしなっとう餅
待春や曾孫旗揚ぐ六地藏

一穂